

大阪湾の人工島「夢洲」と万博

日本経済新聞 25 日夕刊「時を刻む」。大阪湾の人工島「夢洲」の変遷、現在の土地利用計画を伝えている。夢洲は大阪市が 1977 年に埋め立て免許を取得して事業に着手した。当初の利用計画は市内からの工場移転を見込んだ工業用地。83 年に市が市制 100 周年記念事業の一つとして、周辺の咲洲、舞洲を含む 3 島を新都心化する「テクノポート大阪」計画を打ち出し、夢洲には居住機能などが想定された。しかしバブル崩壊で計画は頓挫。市が 2008 年五輪を招致した際には選手村の予定地となったが、これも失敗し、夢洲は「負の遺産」とも呼ばれた。それが万博誘致の成功や IR 計画で息を吹き返し、一躍脚光を浴びることになる。「廃棄物やしゅんせつ土砂の処分場としての大前提があり、時代に応じて土地利用を見直してきた。負の遺産だったとは思っていない」と、大阪港湾局開発調整課の松田克仁課長代理。



391 ㊦の島は成り立ちにより 4 区分される。西側の 1 区は家庭ゴミなどの焼却灰で埋め立てたので緑地やメガソーラーなど制限付きの利用になる。東側の 4 区は大阪港のコンテナヤードとして使用するため陸上残土や山土の搬入でしっかり土地造成をした。西日本最大級の岸壁延長 1350 ㊦、水深 16 ㊦の大深度岸壁も備えた夢洲コンテナターミナルとして、同港のコンテナ取扱量の約 4 割を扱う中核的存在だ。万博予定地の 2 区と IR 予定地の 3 区は海や河川のしゅんせつ土砂を投入してきた軟弱地盤だ。万博会場の中心となるパビリオンワールドの予定地約 30 ㊦は沼地状だったのを排水ドレーンを地面に垂直に埋め込んで圧力を加えて水抜きし、3~4 ㊦の盛り土をした。

整地は完了したように見えるが、敷地内のあちこちに沈下計や傾斜計が設置され、沈下量を計測している。盛り土の重みでさらに水抜きが進んで地盤が沈下するからで、22 年 4 月から 1 年間は「圧密放置期間」として手をつけず、パビリオン建設はその先になる。工事を監督する五洋建設の西口松男・工事所長は「沈下量などを予測する地質推定システムを導入し、沈下の計測管理も充実させた」と説明する。パビリオン建設が始まれば「最盛期は 1 日 1600 台、数千人が働くようになる」（日本国際博覧会協会整備計画課の長谷徹課長）。

記事のなかで、1 区は家庭ゴミなどの焼却灰で埋め立てたので制限付きの利用になるとしている。万博の会場計画では、1 区にあたるグリーンワールドは、交通ターミナルやエントランス広場、屋外イベント広場などが設置される。大阪市港湾局や環境局は、1 区の土壌汚染に警鐘を鳴らし、国際博覧会協会も危険性を認識しているはずだという。環境影響評価準備書「意見書」でも指摘したが、これで安全な万博などできるのか。

(2021 年 11 月 29 日)